

「武雄市図書館・歴史資料館」を建築的に考えた

武雄市図書館・歴史資料館を学習する市民の会

井上 一夫

いのうえ・かずお

はじめに

図書館関連で、建築士の職能で原稿依頼されたのは初めてである。図書館建築だけで書くのにはその設計経験も無く、「武雄市図書館・歴史資料館」（以下「両館」）の建築計画にも関わっていないので、紙幅を埋める自信もない。そこで私の武雄市における公務等の報告を含めて、最終的に「両館」建築と周辺問題（私見・私事）について書き進めたい。すでに『みんなの図書館』2016年2月号で「両館」の履歴的報告をしている。

平成合併前の旧武雄市（以下「武雄市」）を建築的に紹介すれば、小さな町だが御船山に代表されるように自然景観に非常に恵まれた町である。その環境の中で、東京駅設計の辰野金吾（辰野葛西事務所）設計の「武雄温泉楼門・新館」があり、御船山の麓には「旧帝国ホテル」をアメリカの建築家F・L・ライトと建築した遠藤新設計の「如蘭塾」が残されている。

1. 私の建築活動

そのような豊かな景観・建築環境の中で、33歳で旧建設省から武雄市役所に移動し、50歳で自己退職するまで主に公共建築を担当した。最後の5年間は市長公室次長（企画担当）として計画行政を担い、「総合計画・土地利用計画」「リゾート

法対応」「ふるさと創生1億円事業」など、昭和から平成への移行期の企画業務に対応してきた。

市井の建築活動としては、官民協働の建築学習組織として「武雄まちなみ研究会」を立ち上げ、地元建築設計事務所・施工業者の能力アップを図ってきた。この研究会は、崩落寸前レベルにあった辰野の「武雄温泉新館」と、遠藤の「如蘭塾」の調査・再生計画の提案と改修工事で、明治・昭和の官と民を代表する建築家遺産の保存継承に貢献した。その後「新館」は、国指定重要文化財・「如蘭塾」は国登録有形文化財に登録されている。

庁内建築活動では、公共建築の質を高めるために、共通仕様書・特記仕様書・建築標準図類を国並みに整備した。これらの資料と図面と建築基準法を順守すれば、ある程度の能力で公共建築の業務は遂行できる。各種施設の基本設計を庁内で書き、実施設計は市内の建築事務所に外注、現場管理を庁内スタッフで行うことで公共建築の質を担保してきた。

基本設計段階で委託課との打ち合わせ、予算獲得のサポートなど渉外的活動も多く、その場その場で建築専門意見を主張することが重要である。財政部門との調整がつかず「市長査定」でトップの決断を仰ぐが、職能をよく理解しているトップかどうかがキーになる。

特に教育施設は、国の補助金も少なく予算的に厳しい現実がある。さらに、市教委を超えて、現場に出向きヒアリングすることが重要で、それがあれば、実施設計段階で現場の意見を反映させることが出来る。各意見の総合化が、利用者安全・利用者対応・作業しやすい現場環境を造型する。大先生の作品であっても、庁内建築士が関わり他の意見と調整し公共性を担保すべきである。市町の建築工事は、他の事業に比べて大きな予算を用途する。それだけに、倫理的対応が求められれば政治的介入を許しかねない状況をつくる。

2. あの土地への想い

全体的な「まちづくり計画」（総合計画・土地利用計画など）を担当した経過から、建物本来の機能に加えてその施設がどのような土地に建築されたが、その土地履歴についても重要に考えてきた。特に、図書館や博物館などシンボリックな施設につ

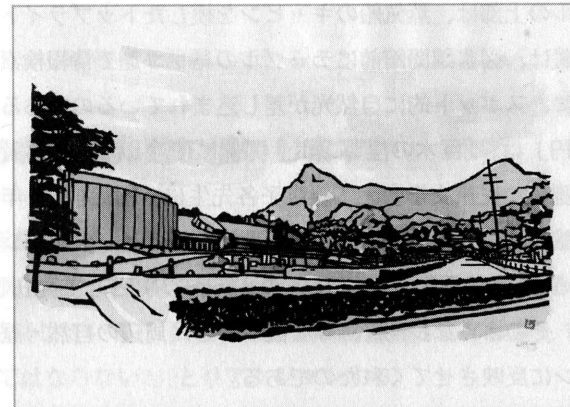
いてはその想いが強い。

利便性だけで考えてしまうと、施設の物語が見えなくなってしまう気がする。特に、わが町のように自然・歴史的に地域資源が豊かなほど、慎重に作業を進め物語を積み上げていく必要があると考えている。

現在「両館」が建築されている土地は、旧建設省武雄河川事務所（以下：事務所）の庁舎敷地（国有地）であった。事務所開設30周年記念事業で、庁舎の現地建替計画が進む中、武雄市は急遽「両館」の建設敷地として用地譲渡（等価交換）を申し出たのである。それに対し事務所も国有財産管理の財務局も、現在地より狭くなる移転先について難色を示し続けていた。地方が国に対し無理難題を申し出ているような状況の中で、鍋島屋敷に隣接した立地条件・鍋島洋学資料の保存継承の重要性を説き続け、市長が先頭に立ち1年以上の時間をかけて取得したかけがえのない土地である。その経過からも、事実上民間に譲渡したような現状の土地利用では、交換国有地の目的外使用と査定されかねない状況である。さらに、狭い敷地に移動してくれた事務所や、当時の市長に対し申し開き出来ない状況が続いている。

3. アイデンティティの小さな谷

「両館」の用地取得までが、武雄市役所における私の業務で建築計画については



《写真1 武雄市民のアイデンティティ=図書館と美しい谷の風景》

《写真 2-1 エントランスホール》

一切タッチしていない。それでも住まい・移転改築した保育園と同じ行政区で、距離的にも100メートル以内の場所にあり、建築中から期待してきた施設である。建築的にも、ほぼパーフェクトなデザインと機能整備が行われ、それは「佐賀県快適建築賞・特別賞」受賞で証明されている。「両館」の10年前に移転改築していた保育園も、第1回「佐賀県快適建築賞・知事賞」を受賞している。それだけこの小さな谷は、御船山の借景の中に奥の武雄神社とそこに延びる参道とシンプルな空間で、そこに参入する建築は謙虚な佇まいを自らに課することになる。まさに、その条件に応えたのが「両館」のデザインであった。残念ながらリニューアル後の「両館」は、「武雄蘭学館」のオランダタイル外壁に「武雄図書館」という間違った電飾看板がキラめいている。帆船・御船丸に並走する蒸気船の姿は、隣接する「子ども図書館」増築で崩れた。過大な照明が夜遅くまで残り、静かな谷の雰囲気壊している。何より、武雄市民の学習・交流・祈りの領域が、域外企業の賑わい営利の場に変えられ、アイデンティティを喪失した想いが続いている。

4. 公共建築としてのデザイン

最初に「両館」を見た時、「佐藤総合計画」の公共デザインはパーフェクトに感じた。木造積層材の大きな空間の中で、RC造の柱の上部のダイナミックな木の枝が大梁を支えている。南側の連続スリット窓から入る小さな光が、大きなコンクリート曲面に反射し館内を明るくしている（ここに巨大書架）。情報センターの大きなサークルテーブルの上部は、蒸気船のキャビンを模したトップライトがついている。早朝に訪れた市民は、図書館開館前にテーブルのパソコンで情報検索している。館内照明の点灯前に、スポット的に自然光が差し込まれているのである。武雄の「ふるさと創生1億円」は、「巨木の里シンポ」開催に用途した。哲学者・梅原猛、霊長類学者・河合雅雄、児童文学者・工藤直子各先生に、樹齢3000年の武雄の大楠をテーマに、自然と共生した持続可能な循環型社会のイメージをプレゼンしてもらった。そのまとめは、武雄千年計画（緑からのメッセージ）として発刊している。「両館」の設計者は、そのような長期計画類を読み解き・周辺の自然・歴史環境を踏査し、建築デザインに反映させてくれたのである。

以下、before ⇒ afterの写真で、武雄市民の「美しい図書館・歴史資料館」が存



before: 「両館」の共有空間、ブックリサイクルなど市民広場として多面的に活用。



after: 書店の売り物テーブル半分占める。スタンド照明用に二重床に改修。

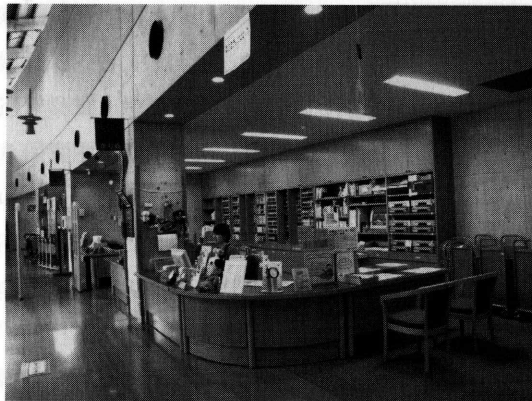
在していたこと、その復権を目指していることを知ってほしい。(写真 2-1 ~ 2-9)

5. 私たちの言動は非難に値いしますか

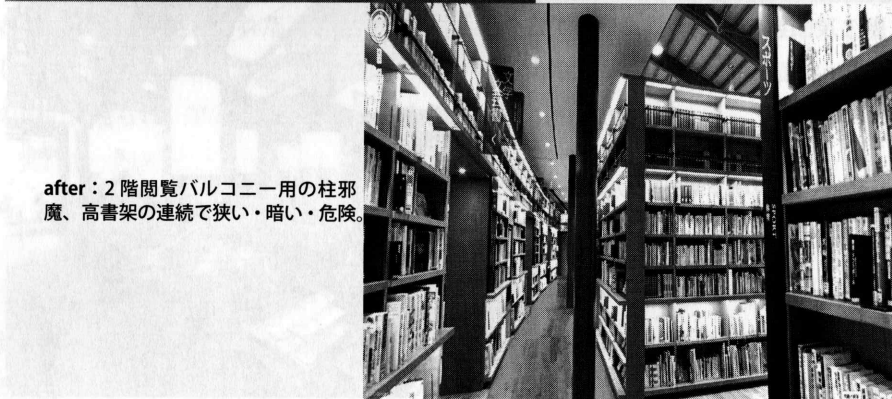
『図書館が街を創る』という出版物がある。副題的に「武雄市図書館の挑戦」や「公共図書館の在り方にイノベーションを!」という活字が見える。それに対して「図書館が町を壊している」「武雄市図書館は図書館として後退している」「図書館の基本を変えてはならない!」とリアクションする。

その本に、指定管理者である企業のお気に入りの建築事務所の代表が書いている。

《写真 2-2 図書館受付カウンター》

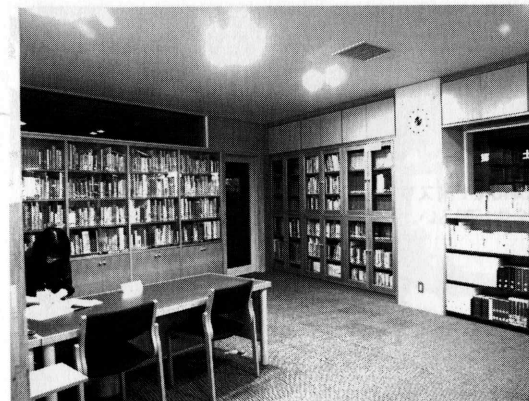


before : 上部 RC 光壁が自然光を館内に反射、冷暖吹き出し書架平行方向。

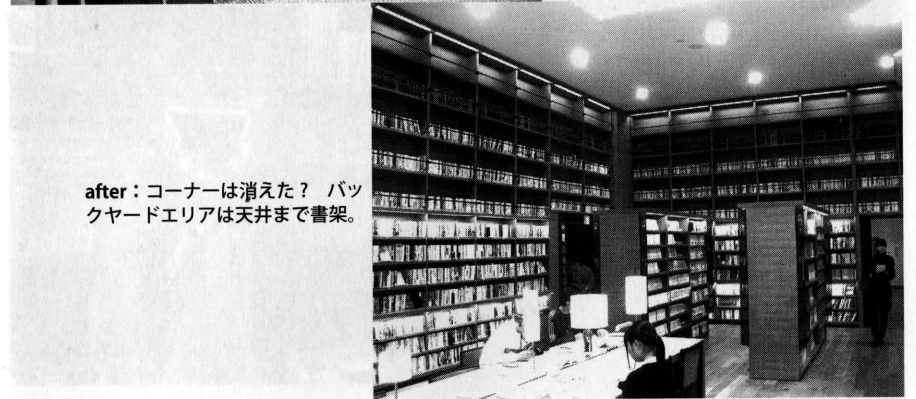


after : 2階閲覧バルコニー用の柱邪魔、高書架の連続で狭い・暗い・危険。

《写真 2-3 郷土資料や公文書コーナー》



before : 閉架書庫と書棚前に司書常席駐、歴史 & 公共資料サポート。



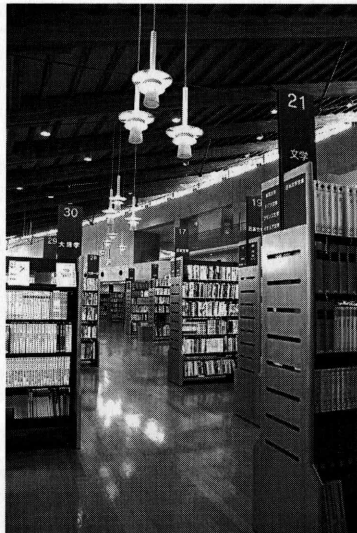
after : コーナーは消えた? バックヤードエリアは天井まで書架。

九州に素敵な木造の図書館があるから見に行かないかと誘われ、現場につくといきなり当地の市長を紹介され、ここを新しい図書館に改修したいので1時間で基本構想をまとめてくれと言われた。そこで“書物というのとは人にとって一つの快楽、それを可視化するために、圧倒的ボリュームを備えた書庫を考えた。エントランスに入って正面の、広大な曲面の壁全面を巨大な書架にする。この書架は、後ろに向かって下り傾斜し勾配をつけられ、さらに書籍の落下防止のバーが渡されている。万一の地震の際も、書物が降り注ぐようなことにはならない。”

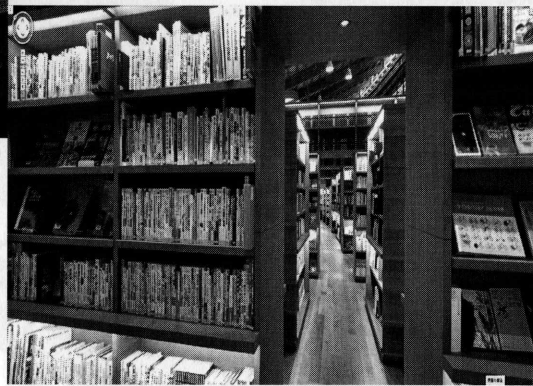
以上のようなことが書かれているが、ここが改修計画のスタートだろう。装飾壁の意味は快楽のための演出だったのである。その快楽は、ツタヤ書店マガジストリートに準備されたもので、図書館エリアからは殆ど見えないしその必要もない。

そもそも10年しか経過していない図書館を、市長の一存で改修できる筈もないし、当初デザインをまったく無視した建築的暴挙である。さらに、歴史資料館は直営にもかかわらずメインの蘭学館が壊され、調査研究スペースのバックヤードはゼロである。2,224点の国指定歴史資料は学芸員の成果であり、まだまだ調査研究する資料が残されている。さらに、構想段階から装飾書架の地震対策を考えていたの

《写真 2-4 図書館内部》



before : 南スリット光がRC壁に反射、館全体が明るい。書架間隔も車椅子の余裕。



after : 20万冊開架で詰め込み、書架は高く通路も狭い。書架は木合板製。

だから、書籍購入予算からさらに高書架補強に予算を廻す必要は無かった筈である。

2017年3月4日地元新聞に以下の投稿をした。「武雄人の誇り蘭学館の復活を」の見出しで、

「蘭学館を壊してレンタルビデオ店に改修、4年後にはそのビデオ店を高校生向けの図書コーナーにする。さらに子どもコーナーの改修不備で新たに子ども図書館を5億円で増築。指定管理期限が18年3月に切れることから、今年度は施設管理の総合評価を行い、次々に予算を求める指定管理を直営に戻すべき。来年は明治維新150年の記念の年、これを機会に蘭学館を復活し次代に継承

《写真 2-5 一般読書コーナー》



before : 北自然採光の緩やかな光で読書。左奥は畳和室コーナー。



after : ツタヤマガジストリート、コーヒーと書店本が読めるのが売り。

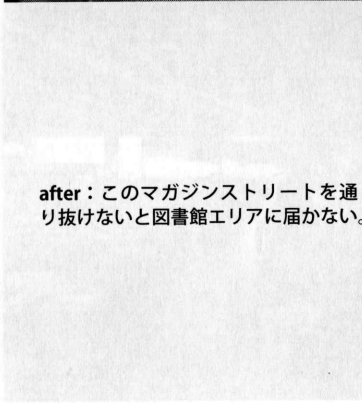
することが武雄人の責務である。」

補足すれば、高校生の図書コーナーの増設は不必要で、要求もあってないだろう。改修の理由に利用されただけではないか。対象高校生は域外から通学の中高一貫生で、家族送迎の待ち合わせ時間調整が主だろう。一方、中高一貫校に通えない≒60%の市内高校生は、電車通学のため図書館を平日に使う時間は無い筈である。土曜に掲載され日曜に電話が鳴りだし、月曜日に市教委の3人が意見徴収に来宅、翌日に保育現場に児童福祉部の最高幹部が訪れた。私に恭順の意思が無かったからだろう。翌日の市議会では「あることないこと書いている」と、実名と家族を含め

《写真 2-6 書架内の読書カウンター》



before : 書架列の読書テーブル、手前スイッチでスタンド照明オンオフ。



after : このマガジンストリートを通り抜けないと図書館エリアに届かない。



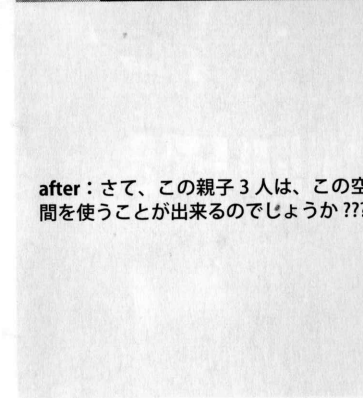
て取り上げられた。「あることないこと」を説明するのが行政と市議会の責務であり、まともな市議会であれば市民バッシングなどあり得ない。

増築の子ども図書館の設計者は「両館」と同じで、増築からして同じ設計思想で書くのが普通である。ところが木造積層であるべき架構が鉄骨に変わっていた。議員間でも木造を鉄骨に変えたと話していたという。さらに、次期5年間の「指定管理契約仕様書」に、「子ども図書館・鉄筋コンクリート造（一部木造）」と書かれているが、現場は（一部鉄骨）になっている。現場が勝手に変更してしまえば、その情報は契約担当課には届かない。さらに、木造積層材から鉄骨造に変更すれば、コスト減と工期短縮が予想されることから、その減額処理・契約変更事務はどのよ

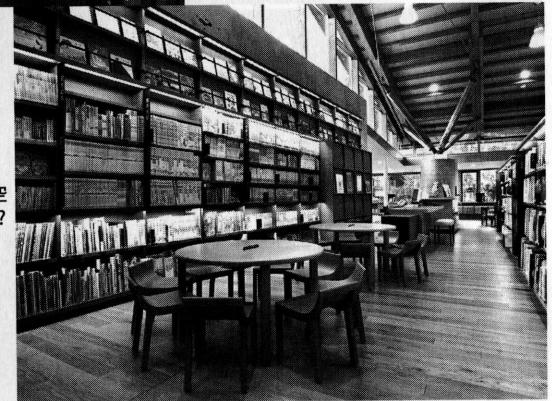
《写真 2-7 図書館子どもエリア》



before : 図書館最後の日、朝、ベビーカーで乳児と幼児を連れた母親に会った。



after : さて、この親子3人は、この空間を使うことが出来るのでしょうか???

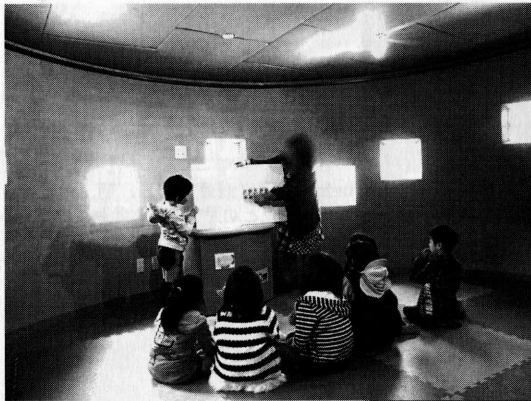


うに処理されたのか、疑問が残る。

おわりに

本誌 2016 年 2 月号で一部報告したが、書籍購入予算を高書架の耐震補強に流用した訴訟問題が佐賀地裁で却下され、10 月 11 日福岡高裁に控訴したという。当初の不都合な真実的案件が未だに尾を引いている。それは裁判官の書類要求に対し、市側が公契約書類等の提出を怠っているのが因ではないか。予定価格を事前公表（国は反対）して入札する自治体も出る中で、関係書類の提出が出てこないのが分か

《写真 2-8 おはなしのへや》



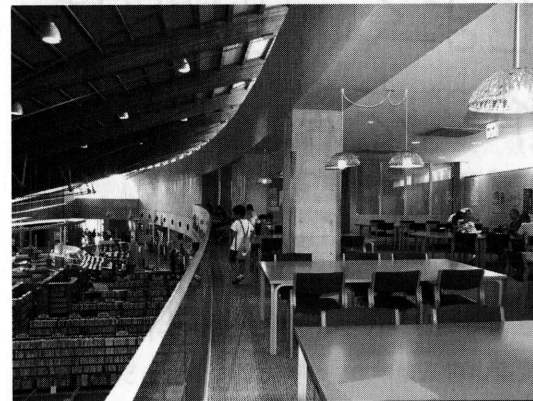
before: 保育園の子どもたちが大型絵本を読んでいる。大楠の祠で遊んだ帰り。



after: は西陽が指す場所、どこに本がある? 右埋込大型テレビ必要ですか?

らない。
「スピードが何よりの付加価値」・「ノウハウ」の2フレーズで突っ走った地方自治、その影響は「両館」だけでなく義務教育に残存しているのが深刻である。レッテル張りして差別化をはかれば、市民は二分化し共通の価値を求め行動を阻まれる。権力依存が助長されるだけである。
「両館」問題に関わり7年が過ぎた。時間の経過と共に他に対応しなければならない課題が見え始めている。個人的だが、50歳で妻がガンを宣告され、急遽保育現場に入らざるを得なかった。多くの計画を残し、実行は後に委ねるしかなかった。今、武雄市はまちづくりの指針である「総合計画」を策定していない。ボトムアッ

《写真 2-9 2階小中学生のオープンな学習エリア》



before: 2階に図書は無い。親子学習やグループ学習で自由に使う。時々1階図書館を俯瞰。



after: 閲覧バルコニーと高書架が図書館全体を壊す。片方向避難で危険空間を創出。照明増。

プで策定する「総合計画」は、トップの恣意的政策運営をチェックし、何より市職員の行政運営の核になる。策定されなければ、指示待ち職員になり挑戦的業務が庁内から消えていく。
少子高齢化はさらに進み、地方財源も先細りにさらに自然災害多発時代に入った。そのような時代だからこそ、市民力・行政力を醸成し持続可能性を求めなければならない。図書館や歴史資料館など、市民が集い学習し誇りを得る市民施設・ハード整備が重要である。さらに、それを機能させる職能(司書・学芸員・建築士等)ソフトを忘れてはならない。